

支援する立場からティーチプログラムの「有用性」をどのように考えるか

京都大学名誉教授 鯨岡 峻

1. 支援する立場の人にとって ASD 児者の「分りづらさ」とそこからくる「困り感」

支援者が初めて一人の ASD 児に関わろうとするとき、多くの場合、通常のコミュニケーションが取れない(自分の思いが通じない)、本人が今何を考えているかが分からない、どう関わったらよいか支援の手がかりになるものが得られない、といった「困り感」を抱くことが多いように思います。そして多くの場合、その「困り感」は ASD の障害特性によるものだと考えられてきました。支援者側のそのような「困り感」から見た時、ティーチプログラムや応用行動分析のアプローチは、いくつかの点でその「困り感」を軽減する面をもち、それゆえにこのアプローチは多くの保護者や支援者に有用性があるとして歓迎されてきたのだと思います。

一方で、ASD のある本人にとっても、周りからの言語的な働きかけの意味が掴めない、健常児・者には些細に見える刺激が自分にとっては大きな混乱を引き起こすなど、環境の刺激や周りからの働きかけに対して大きな「困り感」を抱えていることが、当事者研究などからかなり分かってきました。

さらに最近では、これまで ASD の中核的障害特性は対人的なコミュニケーションにあると考えられてきたのに対して、むしろ感覚面の障害(感覚過敏や感覚鈍麻)や、時系列的な情報処理の困難などが大きな障害特性ではないかと指摘されるようになり、本人のもつ「困り感」と、支援者側の「困り感」が必ずしも一致しないことが指摘されるようになってきました。

ここに ASD という「障害」を挟んで、支援する側と支援を受ける側にそれぞれに異なった「困り感」が抱え込まれていることが明らかになってきて、支援の在り方が改めて問い直される時期に来ているように見えます。

その際、私の関係発達論の立場からは、支援の技法をあれこれ考える前に、本人と支援者との関係性そのものに目を向け直す必要があるように思われます。この点はティーチプログラムにも応用行動分析の方法論にも見られないものです。

2. このプログラムが本人と支援者の双方にとって、どのような意味で「有用性」をもつのか

ティーチプログラムは、ASD の障害特性を踏まえて構成されているだけに、保護者や支援者にとって、本人に関わる際の具体的な手がかりが得やすく、また支援者側の「こうしてほしい」「そうしないほしい」というニーズをこの手続きによって本人の側に伝えやすくなる面が確かにあります。そのためにこのプログラムは、支援する側(支援者や保護者)のニーズに沿うものとして幅広く歓迎されてきたのだと思います。

このプログラムはまた、本人にとっても、自分の意思を身近な人に伝えやすくなったり、環境から受ける混乱を軽減できる面があったりすることから、本人にとっても一定の有用性があったことは確かだと思います。例えば、食事や排泄、入浴などの日常生活のルーティンになっている行動に関して、絵カードを用いて自分の意思を身近な他者や支援者に伝えたり、スケジュール表によって一日の流れの中で、「いつ何をしたいか」を、身近な他者に示したりすることが可能になるなど、

言葉での意思伝達が難しい ASD 児・者にとって、自分の意思を伝える手段としてこのプログラムには有用な面があったことは確かだと思います。

ところが、支援者側にとって、本人に一日の日課をスケジュール表に沿って行動してほしいというニーズがこのプログラムによってある程度満たされることが分かるにつれて、次第にこのアプローチが過大評価され、「このプログラムに沿って関われば子どもを願わしい姿に変えられる」という誇大な期待が保護者側や支援者側に生まれてきました。その結果、療育に関わる支援者や保護者だけでなく、保育者や教員を含め、誰もがこのプログラムを学び、それに従って子どもに対応すべきだという風潮が保護者を中心に広がり、それとは異なる立場や考えを非難し排斥する弊害が生まれたことも見据えておかなければなりません。さらにその過大評価はこのプログラムのマニュアル化を促し、「支援者は何も考えずにこのマニュアルに従えばよい」という安易な態度を支援者側に広げた面も否定できません。

ところで、本人が新しい環境に慣れ、絵カードやスケジュール表によって一日の流れをおおよそ把握できるようになり、周囲の人を過度に怖れなくて済むようになると、こうした支援の必要性は次第に薄れていきます。しかし、では支援者側の「困り感」の問題は軽減されたかと言えばそうではなく、支援者にとってはそれまでとは違った新たな「困り感」（本人の側に対処しづらいこだわりや負の行動があること）が浮上ってきて「ティーチプログラム万能」の幻想は崩れてきます。

そして本人の側も、新しい環境に次第に慣れ、生活が安定し、簡単な言葉（単語など）を用いて自分の意思を或る程度伝えられるようになってくると、絵カードやスケジュール表への依存が次第に減少してきます。このように新しい環境への当初の混乱が落ち着く中で、本人自身がこのプログラムを「卒業」していく姿が見られるようになってきます。

以上を踏まえると、このアプローチは、新しい環境（人的・物的環境）に慣れ、一日の流れを凡そ理解し、身近な他者との関係性が安定するまでの初期過程においては、確かに有用性を持つものと言えます。しかし生活と、身近な他者との関係性が安定してきた段階では、このプログラムは支援の道具としての役割を終えたと考えてもよいのではないのでしょうか（ただし、そこに大きな個人差があること、特に本人の障害が重い場合、このプログラムを卒業することが難しい場合があることを認めておかなければなりません）。

3. このプログラムのもつ弊害

本人が新しい環境に適応する初期過程で有用だったこのプログラムは、支援者側においてその効果が過大に評価されて、「この方法によって子どもを指導し、周囲が望む行動を定着させることができる」という錯覚を生み出す一方、「このプログラムに沿えば支援がうまくいく」という思い込みが支援者側に広がることで、支援の根幹をなす思想、つまり、本人のニーズ（どうしたいのか、どうしたくないのか、どうしてほしいのか、どうしてほしくないのか、等々）や「困り感」を把握し、それに応じるといった基本的な支援の姿勢が崩れる面もあったように私には見えます。

本来、「本人主体」という理念に立てば、ASD のある本人一人一人は、それぞれにおいて異なる「ニーズ」や、それが満たされないことから来る独自の「困り感」をもっていることが、支援の出発点となるはずで、ASD という診断を得ても、ASD 児・者の皆が、同じような「困り感」を持つわけではないのです。従って支援者は、まずはそれぞれにおいて異なる本人のニーズや困り感

を丁寧に把握し、それを理解し、その上で、本人に寄り添いながら支援の在り方を手探りしていくことが求められるはずです。

そこから考えると、本人の負の行動を変えろという強い視点をもつ応用行動分析はもちろん、マニュアル化されたティーチプログラムに対しても、支援の在り方に関して根本的な疑問が生まれてきます。というのも、方法論が支援者の本人に対する見方や考え方を主導するようになると、本人のニーズや「困り感」を感じ取り、それを理解しようとする姿勢が、支援者の内面で弱まり背景化(後景化)してしまうからです。そのために、本人との関係性を築く努力よりも、負の行動を低減し改善することが「支援の中心」と考えられ易くなります。この点に関しては、やはりこれらのアプローチに対して批判の目を向けていかざるを得ません。言い換えれば、マニュアル化されたプログラムが「分かりやすい」「それに従えばうまくいく」と支援者に受け取られた瞬間に、支援の根本精神が見失われてしまう危険性が生じると言うことです。

繰り返しますが、支援とは本来、「支援する側—支援を受ける側」のあいだに何らかの肯定的な情動的関係性が築かれてくることを基盤とするものです。そしてその関係性の基礎には、言葉を使えなくても、双方のあいだに僅かではあれ肯定的な「心の動き」や「情動の動き」が響き合い、通じ合えるようになる、という心的経験の積み重ねがあるはずです。そう考えると、本来、支援の形は一人ひとりにおいて異なる形で紡ぎ出されるものであり、「マニュアルに沿って、決まった対応をすれば十分」と考えることの方がむしろ不自然であると考えられてしかるべきです。

そして本人が今「どうしてほしいか」「どうしてほしくないか」を支援者が把握できるようになるためには、支援者自身が本人の思いを感じ取ろうとする態度や姿勢を培い、それを通して本人の気持ちを僅かなりとも感じ取られるようになることが支援の第1歩です。その支援者の態度や姿勢こそ、支援者養成にとっては何よりも重要なものであるはずなのに、「このプログラムや方法論を用いれば、どのASD児・者に対しても、本人を支援者の望む方向に導くことができる」という思い込みが支援者側に生まれると、その基本姿勢が歪められ、本人を一人の主体として捉える視点が見失われてしまいます。これは、このプログラムや方法論がもたらす負の面であったと言わざるを得ません。

要するに、本人が新しい環境に直面して混乱の極みにある初期段階において、このアプローチの有用性を一部認めながらも、マニュアル化が進み、本人を支援者の願いに引き込むかたちの対応が強まる場合には、「支援者—本人」のあいだに良好な関係性が構築されることが阻害され、本人の意思を無視した支援者主導の対応が本人に向けられ易くなり、その結果、本人の側に「関係性の障壁」が増幅される危険さえ生じます。そこに私たちが支援者側に向けて警鐘を鳴らす理由があります。

4. 「本人主体」という思想が十分理解されないまま、ことばが独り歩きしている現状

我が国の支援論を振り返ると、支援者と本人の関係性は、本人のために何かをしてあげることという「ケア」の発想や、負の行動を低減し正の行動を定着させるという「行動変容」の発想が長らく支援者側の常識として理解され、これが支援の枠組みとしていまだに強く働き続けているように見えます。そしてそれを暗黙の裡に支えてきたのが、「できることが増えることが本人の well-being (幸せ) に繋がる」という支援者側が抱きがちな「発達信仰」であったと思われます

今世紀に入り、「本人を主体として尊重する」という思想が西欧から入ってきて、それを単に「本人のニーズに沿う必要がある」、「本人の意思決定を尊重する必要がある」という主張に単純化して理解するにとどまり、「本人主体」の意味が十分に掘り下げられないままにきたように思われます。その結果、支援者がどのような姿勢で本人に向き合うことが「本人主体」の尊重に繋がるのかの議論は深まらず、単に「本人のニーズの尊重」「本人の自己主張の尊重」「本人の意思決定の尊重」等々いった、綺麗な言葉だけが独り歩きしているように見えます。「本人を主体として尊重する」とは、本人と支援者との関係性の中で考えられなければならないもので、それが支援の中心に来るのでなければなりません。

関係発達論が考える「主体」という概念は、その内面に「自分として生きる」と「周りの人と共に生きる」という両立の難しい二面の心の動きを内包しているという考え方に立つものです。そして望ましい対人関係とは、そのような主体同士が結ぶ相互主体的な関係性であると考えます。ですから、主体を単にニーズや、自己主張や、意思決定が生まれる座と捉えるだけでは不十分です。もしも人間関係が双方のニーズや、自己主張や、自己決定をぶつけ合うだけの関係にとどまれば、「自分として生きる」側面のみが強調され、「周りの人と共に生きる」というもう一つの側面は見失われてしまいます。そしてその関係性は常に衝突と反目を繰り返すだけで、相互主体的な関係性にはなり得ません。相互主体的な関係性が成り立ち、それが持続するためには、「自分として生きる」と同時に、「相手と共に生きる」ことが自分にとっても必要だし大事なことだと感じられるように、それぞれの内面に肯定的な心の動きが生まれてくる必要があります。

この考えは、「支援者—本人」の関係性にも当てはめて考えることができます。良好な両者の関係性を維持するためには、支援者が本人のニーズや自己主張をひたすら受け入れ続けるだけでは不十分です(もしもそのような対応だけが続けば、早晚、支援者は<燃え尽き症候群>に陥ってしまうでしょう)。その一方で、本人の側にも何らかの水準で支援者と共にその場を生きることを肯定的に感じ、支援者を大事に思う「心の動き」がその関係性を生きる中で生まれてくる必要があります。言い換えれば、そのような良好な関係性は、「嬉しい」、「楽しい」、「一緒にやってみたい」といった、人と人を結びつける肯定的な「心の動き」や「情動」が本人と支援者の双方に生まれて初めて、形成されるものではないでしょうか。

この点に関して、スルーフの「情動的相互調整」という考えが参考になります。この考えは、誕生直後から乳児と養育者のあいだに肯定的な情動が行き交うことの重要性を言うものです。つまり、乳児の情動の動きに養育者が合わせる一方、乳児も養育者の情動の動きに合わせてというように相互的に情動を調整し合う関係性がそこに生まれることが、その関係性が良好なかたちで持続するために必要だという考え方です。もしもこの情動調整が巧くいかない場合、そこに「関係性の障害」が生じ、それが修復されないまま放置されれば、その関係性はさらにこじれ、障害は増幅していくこととなります。いわゆる「強度行動障害」はこのような過程を通して形成される可能性があると考えられます。

このスルーフの考えに立てば、本人を支援者が自分の思い通りに動かそうとする一方通行の関わりでは、支援は支援として機能しません。そうではなく、相手に合わせて自らの情動を調整することが双方において生まれることが、好ましい関係性を築く鍵になるということです。つまり情動調整は支援者の側だけがするものではなく、程度の差はあれ、本人の側にも何らかの形で求められるものです。

ASD という障害を挟んで、支援する側と本人のそれぞれの「困り感」が絡み合い、情動的相互調整が難しくなる時（これをスルーフは「情動的相互調整の不調」と呼び、それを放置すると「関係性の障害」に繋がると考えます）、多くの場合、支援者は「本人の側に障害があるからそうなるのだ」と捉えがちです。しかし、関係発達論の立場からは、その不調は双方の困り感の相互作用として理解されるべきもので、その不調を全て本人に帰属すべきではないと考え、相互調整が難しくなってくる場所に「関係性の障害」が立ち上ってくると考えるべきだと思います。

言うまでもなく、ASD 児・者への支援は常に「本人のため」であるべきですが、保護者や支援者が「本人のため」と考えることが、本人の求めるものと常に一致するとは限りません。支援者側の善意に発する対応が、本人にとっては苦痛や回避行動を生む源泉になっている場合が支援の場には少なからず見受けられます。そのような状況では情動的相互調整は望むべくもありません。そこでまず求められるのは、支援者と本人とのあいだに関わりを通して信頼関係が築かれるようになり、双方が相手に肯定的な「心の動き」を感じ取ることができるようになるかどうかです。その基盤の上に、「本人のニーズを尊重しそれに応える」という支援の形が結び付いてくる——そこに、これからの支援の方向性を考える鍵があるのではないのでしょうか。

5. ティーチプログラムと応用行動分析の視点に欠けているものは何か

これまでの議論を纏めると、本人と支援者のあいだにどうにかして良好な関係性を築くことこそが支援の第一歩であると言えます。その一歩に至る手前で、多くの場合、支援者は本人の内面の動きを捉え切れず、悩みや「困り感」を抱えることが多くなります。その際、関わりのきっかけとして、場の構造化や絵カードやスケジュール表が一定の役割を果たすことはあり得ます。しかし、そこから、絵カードやスケジュール表を用いて「子どもの行動を変えよう」とする方向へ支援が大きく傾くと、本人とのあいだに良好な関係性は生まれてきません。良好な関係性を築くためには、まず、支援する側が自分の気持ち（情動の動き）を本人の側に持ち出して、本人の心の動きをキャッチするところから始めなければなりません。それを端折れば、結局は本人の行動を変えることに向かうことになって、本人の内面の心の動きを捉えることができなくなってしまいます。

これに対して、スルーフのいう情動的相互調整の考え方は、大人の側がまず自らの情動を子どもの側に向け、子どもの心の動きに寄り添おうとする姿勢を出発点とします。そして子どもの情動の動きを大人が間身体的に捉え、それを大人の肯定的な情動で包み込もうとします。そうした大人の情動の動きに呼応する形で、子どもも反応を返すようになってきます——その往復の繰り返しの中に、良好な関係性構築のための最初の一歩が立ち上がってきます。こうしたやり取りの積み重ねが、良好な関係性の形成を導き、それを支えていくのだと思います。

私は、発達初期の「子ども—養育者」関係を観察するなかで、大人が子どもの心の動きに寄り添う過程で、大人はいつの間にか「そこにいたまま」子どもの身体に自分の身体を重ねるかのような態勢になり、子どもが今感じている情動を自らの身体において感じるという——つまり子どもの情動の動きを間身体的に感じ取るという——不思議な現象を観察したたことがあります（鯨岡,1997）。それを当時の私は「成り込み」と呼び、乳児と養育者のあいだに関係性が成り立って行く上で、それが重要な役割を果たしていると考えました。

例えば、離乳食を食べて欲しいと願う養育者が、スプーンを持ったまま子どもの口元を見つめ、

その口が開くのを待つうちに、いつの間にか養育者の口が先に開いてしまう現象が観察されます。この成り込みは、養育者が乳児に自分の口の動きを模倣してほしくて、そのモデルを示したものではありません。それはむしろ無意識のうちに生まれるものです。そのような「成り込み」は、乳児と養育者のあいだだけでなく、支援者と本人のあいだでも起こり得る現象ではないでしょうか。実際、この成り込みが起こった瞬間、本人と支援者のあいだには独特の情動の繋がりが生まれ、それが良好な関係性を構築する糸口になる可能性があるかと私は考えてきました。そしてこのような「成り込み」の考えは、重い肢体不自由と重い知的障害が重複した人たちの支援の場ではしばしば取り上げられてきました。にもかかわらず、このような間情動的、間身体的な次元での繋がりを支援者と本人のあいだで考えることは、ティーチプログラムや応用行動分析の議論とは相容れません。

ティーチプログラムや応用行動分析に欠けているもの、それは支援者が自らの情動を媒介して本人の内面の心の動きに触れようとする姿勢、そしてそこに立ち上る情動の動きを支援の中心に据える視点ではないかと考えます。

6. おわりに

最後に、「成り込み」の図を以下に示します。この図が皆さんの実践とどう繋がるかは、是非皆さん方で考えていただきたいと思います。

本人（子ども） 支援者（養育者、保育者、教師）

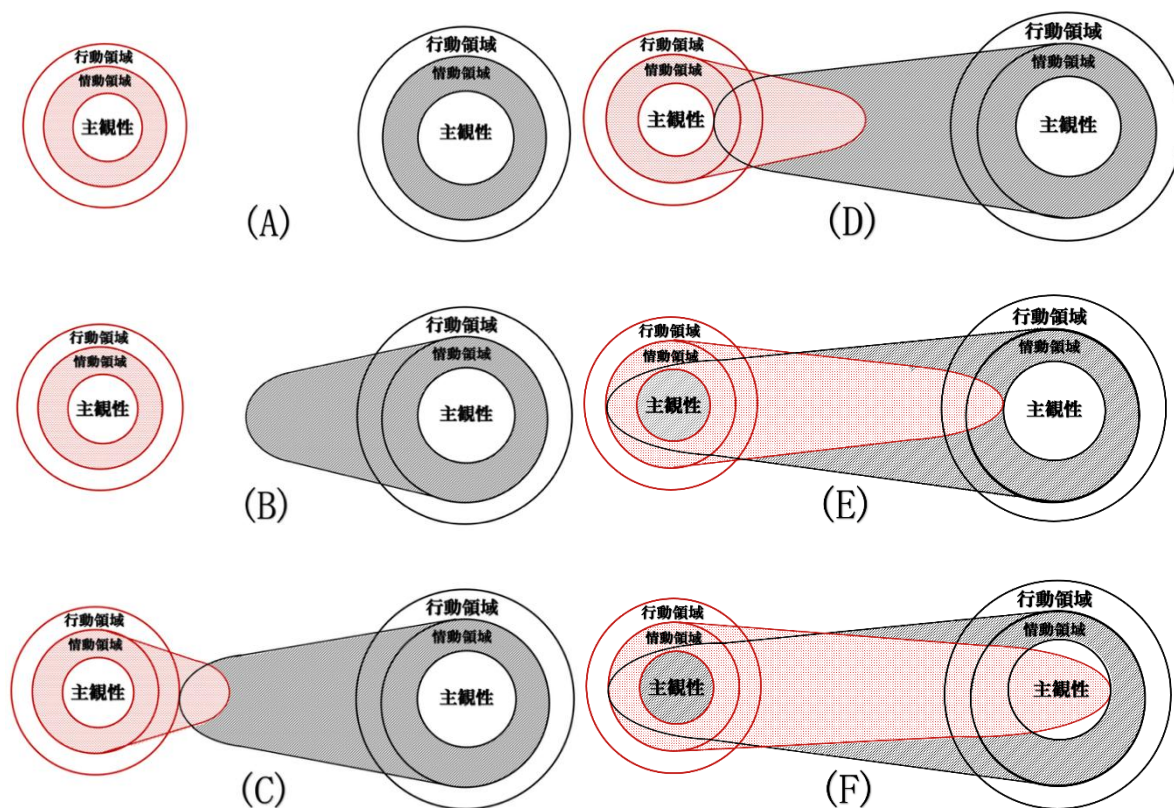


図1. 情動領域は他者身体にまで伸長する

この図1は、子どもも大人も内面に情動領域をもっていて、身体は別個でありながら、情動領域は容易に自己身体をはみ出して他者身体にまで伸びる可能性が人間には備わっているという考えに基づいています。つまり「情動の舌」が自己身体から他者身体に伸びて届く事態を表現しようとしたものです。

図Aはまだお互いが気持ちを向け合っていない状態、図Bは、大人側が僅かに気持ちを子ども側に持ち出そうとしているけれども、まだそれが子どもに届かない状態、図Cはようやく大人の「情動の舌」が子どもに届くようになって、子どもの側からも大人に向けて「情動の舌」が伸び始めた状態、図Dは大人の「情動の舌」が子どもに届き、子どもの側からも「情動の舌」が大人側に伸びているけれども、まだ大人までは届かない状態、図Eは双方の「情動の舌」が伸びて、そこに重なったり絡み合いが生まれ始めた状態、そして図Fは、「情動の舌」がしっかり絡み合って、双方に気持ちの繋がりが感じられるようになる状態、と考えることができます。

この図は元々、乳児と養育者のあいだの非言語的なコミュニケーションが成り立つ様相を説明するものですが、この図を支援者と本人のあいだに関係性が構築されていく流れに重ねて考えて見ても良いのではないかと思います、これを取り上げて見ました。

参考文献

鯨岡峻(1997)『原初的コミュニケーションの諸相』ミネルヴァ書房

鯨岡峻(2006)『ひとがひとをわかるということ』ミネルヴァ書房

Sroufe, I.A, (1989). Relationship and relationship disorders. In Sameroff, A.J. & Emde, E.N.(1989). Relationship Disturbances in early Childhood. Basic Books. (小此木啓吾(監訳), 井上果子・鈴木圭子・福田真実・久保田まり・浜田庸子・山下清美(訳)(2003).早期関係性障害:乳幼児期の成り立ちとその変遷を探る.岩崎学術出版社)